4h刺激した細胞ではTLR2の発現が増加したが，TLR4及び9の発現に大きな変化は無かった．*P. aeruginosa*存在下でFOMはTLR9の発現を増加した．一方で，FOMは*P. aeruginosa*存在下でのTLR2の発現に影響しなかった．本研究からFOMによる免疫修飾作用として，免疫細胞の寿命短縮，及び細菌DNAを介した免疫細胞の抗炎症反応の誘導が関与している可能性が示唆された．

6　LMT-chamber法による小児の抗菌薬に対するアレルギー症例の検討

大石　智洋・小澤　淳一・小嶋　絹子
阿部　忠朗・塚野　真也・田口　哲夫
八木　元広*・宇野　勝次**
県立新発田病院小児科
水原郷病院薬剤部*
福山大学薬学部**

【目的】小児では成人に比し使用可能な抗菌薬が少なく，抗菌薬アレルギーが疑われる場合，治療薬の選択が困難である．そこで，小児を対象とした抗菌薬アレルギーの検討を行った．

【方法】抗菌薬アレルギー疑いの9名（5ヶ月～12歳）に対し，原因と思われる薬剤と，同系統の他の薬剤につき，LMT-chamber法により検討した．

【結果】LMT陽性は6例（ペニシリン（Pe），セフェム（Ce）(2例)，オキサセフェム（Ox），カルバペネム（Ca），14員環マクロライド（Ma））で，発現症状は皮膚症状5例，発熱1例で，潜伏期間は30分～4日であった．Pe-Ce，Ca-Ce・Pe，Ox-Ce，14員環Ma-15・16員環Ma間では交差反応を認めなかった．

【考察】使用可能な抗菌薬が少ない小児では，アレルギーか否かの見極めおよび代替薬の検索は非常に重要であるが，過去に報告はあまりなく，さらなる検討が必要と考えた．

7　当院におけるリネゾリドの使用経験

佐藤　牧・津畑千佳子・手塚　貴文
太田　球磨・田邊　嘉也・下条　文武
田村　隆*・青木　寿成**
新潟大学大学院医歯学総合研究科
臨床感染制御学分野（第二内科）
新潟大学医歯学総合病院薬剤部*
同　診療支援部臨床検査部門**

2006年4月に4番目の抗MRSA薬であるリネゾリド（LZD）が承認されたことに基づき，当院でのLZDの使用状況に関して報告する．

2006年4月1日～2007年2月28日までの11ヶ月間の当院入院患者でLZDを使用した63症例（72エピソード）について使用状況，臨床効果や副作用をレトロスペクティブに検討した．平均年齢は65歳で平均投与期間は11.7日であった．

基礎疾患は消化器系が半数以上を占め，使用頻度は術後感染，呼吸器感染，敗血症，骨感染の順であった．

他の抗MRSA薬での無効例のうち50％で有効であった．副作用は血小板減少，貧血，肝機能障害が代表的で中止に至ったのは6例であった．

前投薬なしに使用されているものが32例（44.4％）あった．当院では抗MRSA薬の使用に関し，届け出制や使用制限など設けていないが，適正使用に関し今後，ICTなどを通じ積極的に介入していく必要性が考えられた．

8　高齢者市中肺炎に対する抗菌薬選択の現状

樋口多恵子・太田　求磨***・古川　俊貴**
川村　邦雄*・藤森　勝也*
県立柿崎病院薬剤部
同　内科*
県立津川病院内科**
新潟大学医歯学総合病院総合診療部***

【目的】日本呼吸器学会成人市中肺炎診療ガイドラインの重症度分類（A-DROP）及びPORTコホート研究の予測基準（PSI）による高齢者市中肺炎患者の層別化と抗菌薬有効率及び入院後30日以内死亡率について検討を行った．